

洪吟

日本語版

李洪志

目 次

その心志を苦しめる	1
人たること	2
覚者	4
誰か敢えて常人の心を捨て去らん	5
願	6
無存	8
法輪大法	9
法に溶け込む	10
正法の船に乗る	11
無為	12
大法を学ぶ	13
圓明	14
正法の門を求める	15
法を得る	16
縁	17
了願	18
助法	19
因果	20
迷いの中で修める	21
着実に修める	22

佛法は圓容	23
再び済度する	24
真修	25
同化して圓滿する	26
大法は迷いを破る	28
三界を跳び出る	29
懸空寺を訪ねる	30
恒山を訪ねる	31
分かれて明らか	32
南華寺を訪ねる	33
自ら修める	34
静観	35
洪	36
天地を主掌する	37
人と覚者の別	38
人と妖との間	39
高き処 寒さに勝えず	40
大覚	41
仕事と修佛	42
劫の後	43
迷い	44
魔に変わる	46
道の中	48

威徳	50
佛主	51
法輪世界	52
縁は聖果に帰す	54
響堂山寺を訪ねる	55
泰山に登る	56
圓滿して功成る	58
太極	59
苦度	60
変異	61
衆生を広く済度する	62
心明らか	63
難の中に乱れず	64
末法	65
執着を放下する	66
有為	67
岳飛廟を訪ねる	68
故里を訪ねる	70
清の東陵を訪ねる	72
善悪已に明らか	73
日月潭を訪ねる	74
長安を憶う	75
心安らか	76

振り返る	77
世界の十悪	78
雁門関を訪ねる	80
同化	82
新生	83
笑う	84

その心志^{しんし}を苦しめる

圓滿して佛果^{ぶつかう}を得

苦^なを嘗めるを樂となす

身を勞するは苦のうちに入らず^い

心を修することこそ 最も難し^{かた}

関という関をみな 突破せねばならぬ

いたる処^{ところ} すべて是れ魔^こ

百の苦 一齊^{いつせい}に降る

その如何^{い かん}に活^いくかを見る

世上の苦に堪え得れば

世^いを出で 是れ佛陀

一九七六年十二月十七日

苦其心志

圓滿得佛果 吃苦當成樂

勞身不算苦 修心最難過

關關都得闖 處處都是魔

百苦一齊降 看其如何活

吃得世上苦 出世是佛陀

一九七六年十二月十七日



人たること

名^なの為^{ため}の者 憤^{いきどお}り恨^{にく}むこと終^{しゅうせい}生

利^りの為^{ため}の者 六^{りく}親^{しん}を識^しらず

情^{じょう}の為^{ため}の者 自^{みづか}ら煩^{ぼんのう}悩^うを招^{まね}く

苦^くしみ相^あ争^{せう}い 業^{ごう}を造^{つく}ること一^{いつ}生

做人

為^{ため}名^な者 氣^き恨^{こん}終^{しゅう}生

為^{ため}利^り者 六^{りく}親^{しん}不^ふ識^し

為^{ため}情^{じょう}者 自^{みづか}尋^{じん}煩^{ぼん}悩^う

苦^く相^あ鬥^{どう}造^{つく}業^{ごう}一^{いつ}生



名を求めざれば 悠々自得

利を重んぜざれば 仁義の士

情に動かざれば 心清らかに慾^{すく}寡なし

身を善^よく修むれば 徳を積むこと一世^{いっせ}

一九八六年七月十三日

不求名悠悠自得

不重利仁義之士

不動情清心寡慾

善修身積徳一世

一九八六年七月十三日



覺者

常人 ^{われ} 我を知らず

我 ^{げんちゅう} 玄中に坐す

利慾の中に 我無し

百年の^{のち}後 我独り

一九八七年二月二日

注：私が法を伝え始める前 自ら独修していた時
に記したもの。

覺者

常人不知我

我在玄中坐

利慾中無我

百年後獨我

一九八七年二月二日

註：在我沒有傳法之前自己獨修時所寫。



誰か敢えて常人の心を
捨て去らん

常人はただ 神仙に成らんことを想う

げんみょう 玄妙の裏に しんさん 辛酸有り

心を修め 慾を断ち 執着を去る

難の中に迷いて せいてん 青天を恨む

一九八八年八月九日

誰敢捨去常人心

常人只想做神仙

玄妙後面有心酸

修心斷慾去執著

迷在難中恨青天

一九八八年八月九日



願

ぼう 茫々たる天地 われ ちい 我 小さしと見る
こうかん そうきゆう 浩瀚たる蒼穹 こ 是れ誰か造れる

願

茫茫天地我看小
浩瀚蒼穹是誰造



乾坤の外 更に^{はて}垠無し

洪願^{こうがん}の為に 大道^{だいどう}を伝えん

一九九〇年一月一日

乾坤之外更無垠
為了洪願傳大道

一九九零年一月一日



む そんな
無 存

生きて求むる所無く

死して留^{とど}まるを惜します

もうねん ^{とうじん}
妄念を蕩尽すれば

佛を修するは難^{かた}からず

一九九一年十月二十日

無 存

生無所求

死不惜留

蕩盡妄念

佛不難修

一九九一年十月二十日



ファールンダーファー
法輪大法

功を修むるに路^{みち}有り 心を徑^{みち}と為^なす

ダーファー
大法は無辺 苦を舟となす

一九九二年七月二十四日

法輪大法

功修有路心為徑

大法無邊苦作舟

一九九二年七月二十四日



法に溶け込む

ぶつこう あまね
佛光は普く照らし

えんめい
礼義は圓明となる

共に精進し

ぜんてい こうみょう
前程に光明あり

一九九二年十二月二十七日

容法

佛光普照

禮義圓明

共同精進

前程光明

一九九二年十二月二十七日



しょうぼう
正法の船に乗る

しん げん
真なるか 玄なるか 修するか

こつ こう
惚たるかな 恍たるかな 悟るかな

一九九三年一月十七日

乗正法船

真乎玄乎修乎

惚兮恍兮悟兮

一九九三年一月十七日



無^む為^い

三教の修煉 無為を説く

心 正しく用いざれば 即ち有^う為^い

専^{もつ}ら善^{ぜん}事^じを行うも やはり是^これ為^いなり

執着の心を去れば 真の無為なり

一九九三年一月十七日

無為

三教修煉講無為

用心不當即有為

專行善事還是為

執著心去真無為

一九九三年一月十七日



ダーファー
大法を学ぶ

根基は 先天の条件なり

しょうご
正悟は 上士の^{えいん}慧因なり

真善忍^{そん}を存すれば 心中^{しんちゅう どう}に道有り

ファールンダーファー
法輪大法を修すれば 圓滿すべし

一九九三年二月十八日

學大法

根基為先天之條件

正悟為上士之慧因

存真善忍心中有道

修法輪大法可圓滿

一九九三年二月十八日



えん めい
圓明

心に真善忍を懷^{いだ}き

己^{おのれ}を修め 利^{たみ}を民^{あと}に与う

ダーファー
大法 心を離れざれば

他年 必ずや人を超えん

一九九四年二月二十八日

圓明

心懷真善忍

修己利與民

大法不離心

它年定超人

一九九四年二月二十八日



しょうぼう
正法の門を求める

機能は本より小術

ダーファー こ
大法は是れ根本なり

一九九四年四月二日

求正法門

功能本小術

大法是根本

一九九四年四月二日



法を得る

真に^{ダーファー}大法を修し

ただこれのみを大と^な為す

^{ダーファー}
大法に同化し

他年 必ずや成らん

一九九四年七月七日

得法

真修大法

唯此為大

同化大法

它年必成

一九九四年七月七日



縁

^{だいかく}
大覚 心更に明らかなり

法を得て 世間^ゆを行く

悠々たり 数千年

縁到りて 法^す已に成る

一九九四年八月二十七日

縁

大覺心更明

得法世間行

悠悠數千載

縁到法已成

一九九四年八月二十七日



りょうがん
了願

同じ心にて 世間に來たる

法を得て 已^{すで}に先んず

他日 天に飛び去らん

自在にして 法は無辺なり

一九九四年八月二十七日

了願

同心來世間

得法已在先

它日飛天去

自在法無邊

一九九四年八月二十七日



じょ ほう 助 法

ほっしん
発心して 衆生を済度せん

師を手伝いて 世間ゆを行く

わ ファールン
吾が法輪を転ずるに協力して

法成りて 天地を行く

一九九四年八月二十八日

助 法

發心度衆生

助師世間行

協吾轉法輪

法成天地行

一九九四年八月二十八日



因果

是れ修行の路上の苦に非ず^{あら}

生々世々 業力ぞ阻む^{はば}

意を決して業を消し 心性を修め

永く人身を得て 是れ佛祖^{ぶつそ}

一九九四年九月十五日

因果

非是修行路上苦

生生世世業力阻

横心消業修心性

永得人身是佛祖

一九九四年九月十五日



迷いの中で修める

常人は知り難し^{がた} 修煉の苦

争い闘うを 福と為す^な

修めて 執着に一つの漏れ無くば

苦去りて甘来^{かん}たる 是れ真^この福なり

一九九四年九月十五日

迷中修

常人難知修煉苦

争争鬥鬥當作福

修得執著無一漏

苦去甘來是真福

一九九四年九月十五日



着実に修める

法を学びて 法を得たり

比^ひして学び 比して修す

事々 対照し

やり遂げてこそ 是^これ修なり

一九九四年十月七日

實修

學法得法

比學比修

事事對照

做到是修

一九九四年十月七日



佛法は圓容

広く^{ダーファー}大法を伝え

人を済度して 五行^いを出づ

恒心^{こうしん}をもって修煉し

圓滿して 三界を超ゆ

一九九四年十月十五日

佛法圓容

廣傳大法

度人出五行

恒心修煉

圓滿超三界

一九九四年十月十五日



再び済度する

フアーレン
法輪常に転じて 衆生を済度す

法を学び法を得て 心性を修む

末法の時 ^{りん}輪は再び転ず

縁有る士 心に法明らかなり

一九九四年十二月二十七日

再度

法輪常轉度眾生

學法得法修心性

末法之時輪再轉

有縁之士心法明

一九九四年十二月二十七日



真 修

心に真善忍^{そん}を存すれば

ファールンダーファー
法輪大法 成就す

常に心性を修むれば

圓滿して 妙^{みょう}なること窮^{きわ}まり無し

一九九四年十二月二十七日

真 修

心存真善忍

法輪大法成

時時修心性

圓滿妙無窮

一九九四年十二月二十七日



同化して圓滿する

乾坤は茫々たり

いちりん こんこう
一輪の金光

覺者世にくだり

天地 向きを同じくす

同化圓滿

乾坤茫茫

一輪金光

覺者下世

天地同向



宇宙は朗々たり
法の光に同化す
圓滿して飛昇し
共に天堂に帰る

一九九四年十二月三十一日

宇宙朗朗
同化法光
圓滿飛升
同回天堂

一九九四年十二月三十一日



ダーファー
大法は迷いを破る

悠々たる万事^{ばんじ} 眼を過ぐる煙雲^{まなこ す えんうん}

常人の心を迷わし留む^{まよ とど}

茫々たる天地^{ぼう} 何の為に生ず

衆生の智では答え難し^{がた}

一九九五年一月二十七日

大法破迷

悠悠萬事過眼煙雲

迷住常人心

茫茫天地為何而生

難倒衆生智

一九九五年一月二十七日



三界を跳び出る

常人の苦樂を心に留^{とど}めざれば

乃ち修煉者なり

世間の得失に執^{しゅう}せざれば

羅漢なり

一九九五年五月

跳出三界

不記常人苦樂

乃修煉者

不執於世間得失

羅漢也

一九九五年五月



けんくうじ
懸空寺を訪ねる

ひやくじょう さんがい ちゅうくう かか
百丈の山崖 寺は中空に懸る

ダーファー かん う かた
大法を洪伝して 閑を得ること難し

今生 重ねて古崖こがいの寺を訪ね

他日 法を正して 万まんの寺に伝わらん

一九九五年六月十一日

遊懸空寺

百丈山崖寺中懸

洪傳大法難得聞

今生重遊古崖寺

它日法正萬寺傳

一九九五年六月十一日



こうざん
恒山を訪ねる

つね みね いずこ
山恒にして雲の嶺 道は何処に在る

ゆうかく
古き道観悠々として 遊客来たる

げんちゅう みょう
常人は玄中の妙を知らず

こびょう むさぼ
古廟を利用して 黒き財を貪る

一九九五年六月十一日

遊恒山

山恒雲嶺道何在

古觀悠悠遊客來

常人不知玄中妙

利用古廟發黑財

一九九五年六月十一日



分かれて明らか

佛来たりて 世の中を行く^ゆ

常人は迷いて醒めず^さ

どくしゃ はなは
毒者は甚だしく佛を害す

善悪は已^{すで}に分かれて明らかなり

一九九五年七月二十六日

分明

佛來世中行

常人迷不醒

毒者甚害佛

善惡已分明

一九九五年七月二十六日



なんかじ
南華寺を訪ねる

佛門じょうちの浄地せいせい 清静がたたり難し

魔道邪心 世を乱して横行す

名勝めいしょうなればなるほど 魔いよいよ多し

人入り乱れて呼び売り 爆竹が鳴る

一九九五年八月十五日

遊南華寺

佛門浄地難清静

魔道邪心亂世行

越是名勝魔越多

人雜叫賣鞭炮鳴

一九九五年八月十五日



自ら修める

ダーファー
大法 大いに広まるも

いくにん よ え
幾人か能く得ん

しげ じゅう
世間の繁き事 重々たり

ひやくぼう う
百忙の間にも 自ら修め得べし

えんうん ひと す
他日 煙雲 一たび過ぎなば

どう すで
真の道を已に得たるを 初めて知る

一九九五年十月六日

自修

大法洪揚

幾人能得

世間繁事重重

百忙之間可自修

它日煙雲一過

方知真道已得

一九九五年十月六日



静 観

せいしゅう かん
静修の閑に 神仙を見る

各々神通を顕して 千百年

人心は魔と変じ 世は同じからず

しゅうしん 衆神は済度せず ごう 劫の終わるを待つ

一九九五年十月十六日

靜 觀

靜修閒來看神仙

各顯神通千百年

人心魔變世不同

眾神不度待劫完

一九九五年十月十六日



こう
洪

そうきゅう
蒼穹は無限に遠く

うつ がんぜん
念を移せば眼前に到る

乾坤は無限に大きく

ファールン めぐ
法輪 天地に旋る

一九九五年十一月九日

洪

蒼穹無限遠

移念到眼前

乾坤無限大

法輪天地旋

一九九五年十一月九日



天地を主掌する

天の大なること 天上に天有り

同じく日月有りて 層々として蒼宇に満つ

地の広きこと 天有り地有り

共に生ずる万物 芸々として乾坤に遍し

一九九五年十一月十日

主掌天地

天之大天上有天

同有日月層層滿蒼宇

地之廣有天有地

共生萬物芸芸遍乾坤

一九九五年十一月十日



人と覚者の別

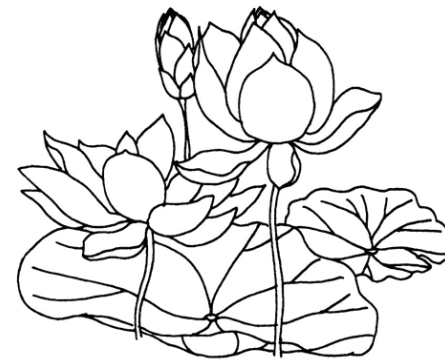
人とは何ぞ 情慾身に満つ^み
神とは何ぞ 人心存^{そん}する無し
佛とは何ぞ 善徳^{おお}巨いに在り
道とは何ぞ 清静^{せいせい}なる真人

一九九五年十一月十日

人覺之分

何為人 情慾満身
何為神 人心無存
何為佛 善徳巨在
何為道 清靜真人

一九九五年十一月十日



人と妖との間

狐 ^{いたち} 鼬 ^{はりねずみ} 針鼠 蛇 世間を乱し

^{こくえんしょうき} 黒煙瘴氣立ちこめて ^{たいせん} 大仙を降ろして舞う

師無く 修無くして ^{だいし} 大師と称し ^{しょう}

^{てん きょう} 癡々狂々として 二十年

一九九五年十一月十一日

人妖之間

狐黃白柳亂世間

烏煙瘴氣跳大仙

無師無修稱大師

癡癡狂狂二十年

一九九五年十一月十一日



高き^{ところ}処 寒さに^た勝えず

人の世の事に 心を尽くし

天上の苦に 心を労す

^{げん}言有るも 誰にか訴えん

更に寒きは 高き処に在り

一九九五年十一月十一日

高處不勝寒

操盡人間事

勞心天上苦

有言訴於誰

更寒在高處

一九九五年十一月十一日



大 覺

^{ばんばん}
万般の苦を^へ経尽くし

^{りょうきやく} ^{せんま}
両脚 千魔を踏む

^{しょう} ^{ふる}
掌を立つれば 乾坤震い

空を横切りて立つ 巨大なる佛

一九九五年十一月十二日

大 覺

歷盡萬般苦

兩腳踏千魔

立掌乾坤震

橫空立巨佛

一九九五年十一月十二日



仕事と修佛

佛教 戒を伝えること二千五百年

名利をまず去り しかる^{のち}後に苦を修す

^{こんにち}今日の和尚は 給料をもらい

出勤するに また作業服有り

一九九五年十二月二十五日

打工與修佛

佛教傳戒二千五

名利先去再修苦

今日和尚發工資

上班還有工作服

一九九五年十二月二十五日



劫ごうの後

絶ぜつ微びにも絶ぜつ洪こうにも 腐敗たいせし物平たいらぎ

洪じっ微ぼう十方じゅうに 蒼穹そうきゅうを見る

天きよ清たいく体透き通り 乾坤正し

兆ちょう劫ごう已すでに過ぎて 宇宙明らかなり

一九九六年一月二日

劫後

絶微絶洪敗物平

洪微十方看蒼穹

天清體透乾坤正

兆劫已過宙宇明

一九九六年一月二日



迷い

うん 芸々たる衆生 そうう み 蒼宇に満つ

層々に天有り みな地有り

奇景 たえ 妙なること ぎわ 窮まり無し

世人は 迷いて醒めず

迷

芸芸衆生満蒼宇

層層有天皆有地

奇景妙無窮

世人迷不醒



想い見るも 語るは易^{やす}きにあらず
修行は 梯^{はし}を登るが如^{ごと}し
迷いを破るは 高^{ところ}き処に在り
壯観なり 妙なること言い尽くし難^{がた}し

一九九六年一月三日

想見談何易
修行如蹬梯
破迷在高處
壯觀妙難訴

一九九六年一月三日



魔に変わる

天象 大いに変わり

世人 善念無し

人心制御を失い 魔性^{あらわ}顕る

天災 じんか うれ うら
人禍 憂いと怨み

魔 變

天象大變

世人無善念

人心失控魔性顯

天災人禍憂怨



人々 敵の如く相見え

事々 全て意の如くなり難し

世人 その故をいかでか知らん

修道者は その迷いを知り得べし

一九九六年一月四日

人人相見如敵

事事都難如意

世人怎知何故

修道者可知迷

一九九六年一月四日



道の中

心ここに在らざれば

世と争うこと無し

視れども見えず

迷わず^{まど}惑わず

聴けども聞こえず

その心乱し^{がた}難し

道中

心不在焉

與世無争

視而不見

不迷不惑

聴而不聞

難亂其心



^{しょく}
食すれども味わわず

口は執着を断つ

^な
做せども求めず

常に道の中に^い居る

静かなれども思わず

^{げんみょう}
玄妙見ゆべし

一九九六年一月四日

食而不味

口断執著

做而不求

常居道中

静而不思

玄妙可見

一九九六年一月四日



威 徳

ダーファー
大法 身を離れず

心に真善忍そんを存す

世間の大羅漢

しん き
神鬼 大いにおそ懼る

一九九六年一月六日

威 徳

大法不離身

心存真善忍

世間大羅漢

神鬼懼十分

一九九六年一月六日



ぶつ しゅ
佛 主

誰か天地の大なるを知らん

銀河は^{きゃつか}脚下に在り

乾坤 いかほど遠きぞ

^{てんりん}
転輪 手中に握る

一九九六年一月六日

佛 主

誰知天地大

銀河在脚下

乾坤有多遠

轉輪手中拿

一九九六年一月六日



ファールン
法輪世界

びみょうきわ ことば がた
美妙窮まり尽くして 語にて述べ難し

こうさいばんせん そうもく かがや
光彩万千 双目を耀かす

法輪世界

美妙窮盡語難訴

光彩萬千耀雙目



ぶつこくせいち ふくじゆ
佛国聖地 福寿全て備わる

ファールン ところ
法輪世界 高き処に在り

一九九六年一月二十三日

佛國聖地福壽全
法輪世界在高處

一九九六年一月二十三日



縁は^{せいか}聖果^きに帰す

師を^{たず}尋ぬること 幾多^{いくた}の年^{とし}

一朝^{いちちよう} 親しく^{まみ}見ゆるを得たり

法を得て 帰るべく修し

圓滿して 師に^{したが}随いて^{かえ}還る

一九九六年一月二十三日

縁歸聖果

尋師幾多年

一朝親得見

得法往回修

圓滿隨師還

一九九六年一月二十三日



きょうどうさんじ
響堂山寺を訪ねる

じつげつ か が
日月は 代わる代わる転じ

こ てんりん
乾坤は 是れ転輪なり

はじ ま
指を弾く間に 二百年

ふる そん
響堂 旧き姿は存せず

一九九六年三月六日

遊 響 堂 山 寺

日月輪流轉

乾坤是轉輪

拈指二百年

響堂舊無存

一九九六年三月六日



たいざん
泰山に登る

よ 攀じ上る 高き階 せんじゃく 千尺の路
うねりて 険しく 歩を起こし 難し
振り返れば しょうぼう 正法を修するが如し
天半ばにとど 停まらば とくど 得度し難し

登泰山

攀上高階千尺路
盤回立陡難起步
回首如看修正法
停於半天難得度



こうしん
恒心をもって足を^あ挙ぐ ばんぎん もも
万斤の腿

苦を忍び精進して 執着を去る

ダーファー
大法弟子 千百万

功成りて圓滿し 高き^{ところ}処に在り

一九九六年四月十五日

恒心舉足萬斤腿

忍苦精進去執著

大法弟子千百萬

功成圓滿在高處

一九九六年四月十五日



圓滿して功成る

名利情を修し去り

圓滿してそうきゅう蒼穹のぼに上る

慈悲をもって世界を見れば

ようやく迷いの中より醒む

一九九六年四月二十一日

圓滿功成

修去名利情

圓滿上蒼穹

慈悲看世界

方從迷中醒

一九九六年四月二十一日



太極

がいせい しんじん ちょうさんぼう
蓋世の真人 張三豊

だいどう ゆ
大道無敵 天地を行く

こうせい な
後世名の為に 拳法を乱し

わ けが
吾が太極を改め 吾が名を汚す

一九九六年七月一日

太極

真人蓋世張三豊

大道無敵天地行

後世為名亂拳法

改吾太極壞吾名

一九九六年七月一日



苦 度

危難の来たる前に 法船を駕す

億万の艱險 重々に阻む

支離破碎せる 乾坤を載せ

一夢万年 終に岸に着く

一九九六年九月二十三日

苦 度

危難來前駕法船

億萬艱險重重攔

支離破碎載乾坤

一夢萬年終靠岸

一九九六年九月二十三日



変異

陰陽 ^{さかしま か} 倒に懸かり

世人 心変わる

鬼獣 ^{きじゅう あまね} 地に遍くして

人 ^{どう} 道を離るること遠し

一九九六年九月二十六日

變異

陰陽倒懸

世人心變

鬼獸遍地

人離道遠

一九九六年九月二十六日



衆生を広く済度する

常人の心を^{ほうげ}放下して
法を^う得れば 即ち^こ是れ神
三界の外に^い跳び出で
天に登りて ^{ぶっしん}佛身に乗る

一九九六年十月十六日

廣度衆生

放下常人心
得法即是神
跳出三界外
登天乘佛身

一九九六年十月十六日



心明らか

師と^な為りて法を広め 衆生を済度す

^{し かい}四海経を取りて ^{ほうせん}法船に登る

十悪の^{どくせ}毒世に ^{ダーファー}大法を伝え

^{ファールン てんどう}法輪を転動し 乾坤を正す

一九九六年十月十六日

アトランタにて

心明

為師弘法度眾生

四海取經法船蹬

十惡毒世傳大法

轉動法輪乾坤正

一九九六年十月十六日

於亞特蘭大



難の中に乱れず

しょうぼう
正法伝わり

難の上に難加わり

ばんまはば
万魔阻み

けん
険の中に険有り

一九九六年十二月二十二日

難中不亂

正法傳

難上加難

萬魔攔

險中有險

一九九六年十二月二十二日



末 法

世人に仁なく

神も神にあらず

人の世に^{どう}道無く

正念は^{いずこ}何処にか^{そん}存せん

一九九六年十二月二十二日

末 法

世人不仁

神也不神

人間無道

正念何存

一九九六年十二月二十二日



執着^{ほうげ}を放下する

世間 人みな迷い

名と利に執着す

古人^{まこと} 誠にして善なり

心静かにして 福寿^{ふくじゅ}備わる

一九九六年十二月二十五日

放下執著

世間人都迷

執著名與利

古人誠而善

心靜福壽齊

一九九六年十二月二十五日



有為

びよう 廟を建て 神をおがむ事 まこと 真に忙し

有為は一場の空なりと 知らんや

ぐめい 愚迷にして さいてん 西天の路を妄想し

手探りに夜を歩き 月をすくわんとす

一九九七年三月二十八日

有為

建廟拜神事真忙

豈知有為空一場

愚迷妄想西天路

瞎摸夜走撈月亮

一九九七年三月二十八日



がくひびょう
岳飛廟を訪ねる

悲壮なる歴史は 流水の如く去り

浩氣忠魂 世間に留まる

遊岳飛廟

悲壯歴史流水去

浩氣忠魂留世間



千古の遺廟^{いびょう} 心痛む処^{ところ}

ただ丹心^{たんしん}のみ有りて 後人^{こうじん}を照らす

一九九七年九月十一日 湯陰^{とういん}にて

千古遺廟酸心處

只有丹心照後人

一九九七年九月十一日 於湯陰



ふるさと
故里を訪ねる

しゅうう めん
秋雨 綿々として涙に似たり

てい しんばい
涕々として 心肺を痛ましむ

きょうり きゅうち
郷里に旧知無く

かそう いくたび すた
家莊 幾度か廢る

訪故里

秋雨綿似淚

涕涕酸心肺

鄉裏無故人

家莊幾度廢



来たり去りて 八百秋^{しゅう}

誰か知らん 吾^{われ}はまた誰ぞと

頭^{こうべ}を垂れて 幾本^{こう}の香をたき

煙は 旧知に向かいて飛ぶ

身^{めぐ}を回らせば 心願^{しんがん}かなう

再び来たりて 衆生を済度して帰らん

一九九七年九月十一日

岳飛の故里にて

來去八百秋

誰知吾又誰

低頭幾炷香

煙向故人飛

回身心願了

再來度眾歸

一九九七年九月十一日

於岳飛故里



清の東陵を訪ねる

三百の歲月 水流に似たり

きゆうでんこうちょう まんもく
旧殿荒塚 満目の秋

誰か知らん こんにち 今日また世に来たるを

他日法を正して 万古に留まらん

一九九七年十月二十六日

こうきりょう
康熙陵にて

遊清東陵

三百歲月似水流

舊殿荒冢滿目秋

誰知今日又來世

它日法正萬古留

一九九七年十月二十六日

於康熙陵



善惡^{すで}已に明らか

衆生魔と変じ^{わざわ きわ} 災い窮まり無し

ダーファー
大法 乱世の中に救い済度す

正邪を分かつ^{てんぼう そし} 天法を誇る

十惡の徒^{しゅうふう} 秋風を待つ

一九九七年十一月十五日

善惡已明

衆生魔變災無窮

大法救度亂世中

正邪不分謗天法

十惡之徒等秋風

一九九七年十一月十五日



にちげつたん
日月潭を訪ねる

いったん めいこ
一潭 明湖の水

えんか
煙霞 幾筋もの輝きを映す

身は乱世の中に在り

みづか えがた
独り自ら美なるは得難し

一九九七年十一月十七日

遊日月潭

一潭明湖水

煙霞映幾輝

身在亂世中

難得獨自美

一九九七年十一月十七日



長安を憶う^{おも}

^{しんせん} 秦川 ^{さんすい} 山水変じ

長安は 土の下に^{そん}存す

^{せいよ} 盛世 天朝去り

^{またた} 瞬く間に 千百の春

^{いずこ} 何処にか ^{たいそう} 太宗を ^{たず} 尋ねん

^{ダーファー} 大法 唐人を済度す

一九九七年十一月二十二日

憶長安

秦川山水變

長安土下存

盛世天朝去

轉眼千百春

何處尋太宗

大法度唐人

一九九七年十一月二十二日



心安らか

縁已に結すでばれ

法は修するに在り

多く書を読めば

圓滿近し

一九九八年一月二十七日

安心

縁已結

法在修

多看書

圓滿近

一九九八年一月二十七日



振り返る

悠々たる万古の事
迷いの中の人を造り成す
誰か言わん 智慧大なりと
情の中に乾坤を舞わす

一九九八年二月十九日

回首

悠悠萬古事
造就迷中人
誰言智慧大
情中舞乾坤

一九九八年二月十九日



世界の十悪

人に善念無く 人々敵と為る^な

伝統を破壊し 文化は退廃^{たいはい}す

同性の慾に乱れ 心暗く魔と変わる

賭けを興^{おこ}し毒を興し 心の欲^{ほつ}する所に随う

性の乱れを開放し 邪惡へと導く

世界十惡

人無善念 人人為敵

破壊傳統 文化頹廢

同性慾亂 心暗魔變

興賭興毒 隨心所欲

開放性亂 導向邪惡



こく 黒社会と乱党 政と匪は一家

ほしいままに民を乱し 天に逆らい道に叛く

科学を迷信し 人類を変異せしむ

暴力を吹聴して崇め 勇を好み残忍を競う

宗教は邪に变じ 銭客政客なり

一九九八年七月七日

黒幫亂黨 政匪一家

自主亂民 逆天叛道

迷信科學 變異人類

吹崇暴力 好勇鬥狠

宗教邪變 錢客政客

一九九八年七月七日



がんもんかん
雁門関を訪ねる

雁門関に登り立てば

いん 隠々として 胸の内にひるがえ 翻る

千年の古き道在り

かんちゅう 関中 かつての煙なし

遊雁門關

踏上雁門關

隱隱胸内翻

千年古道在

關中無故煙



えんしょう
延昭 馬を驅りて去り

風雲 逝くこと一千

目を挙げて 関の下を望めば

ダーファー
大法は 中原に在り

一九九八年八月十日 雁門関にて

延昭揮馬去

風雲逝一千

舉目望關下

大法在中原

一九九八年八月十日於雁門關



同化

きょう
経はその心を修め

功はその身を煉る

他日圓滿して

真善忍^{そん}存す

一九九二年十一月十八日

一九九八年八月 改訂

同化

經修其心

功煉其身

它日圓滿

真善忍存

一九九二年十一月十八日

一九九八年八月修改



しん せい
新 生

しょうぼう
正法伝わり

ばん まはば
万魔阻む

衆生を済度し

観念転ず

腐敗せし物滅び

こうみょうあらわ
光明顕る

一九九八年九月七日

新 生

正法傳

萬魔攔

度眾生

觀念轉

敗物滅

光明顯

一九九八年九月七日



笑う

我笑う 衆生の覚め悟るを

我笑う ダーファー 大法の伝わり始むるを

我笑う とせん 渡船の出航するを

我笑う 衆生に望み有るを

一九九八年十一月十六日

笑

我笑 衆生覺悟

我笑 大法開傳

我笑 渡船起航

我笑 衆生有望

一九九八年十一月十六日



